



〔TOPIC〕

日本のオイスカファミリーへ

# 恩返しの OBOG募金

オイスカは創立以来、主にアジア太平洋地域で地域開発や環境保全活動とそれらを担う人材の育成に取り組んできました。オイスカで学んだ青年たちは「オイスカファミリー」としての結束も固く、中でも訪日研修生たちは、さまざまな国の仲間と同じ時を過ごし、国境を越えた絆を結んでいます。それは、日本のセンター、スタッフたちとも同様で、昨年12月から実施した「OBOG募金」では、彼らの訪日研修への特別な思いを改めて垣間見る機会となりました。担当スタッフのコメントとともに、取り組みを振り返ります。

「OBOG募金」寄附人数内訳 (4月1日時点)

| 国           | 人数  |
|-------------|-----|
| Bangladesh  | 17  |
| Cambodia    | 5   |
| Fiji        | 8   |
| Honduras    | 1   |
| India       | 2   |
| Indonesia   | 57  |
| Malaysia    | 22  |
| Mongolia    | 16  |
| Myanmar     | 57  |
| Philippines | 58  |
| Sri Lanka   | 10  |
| Thailand    | 13  |
| その他 (日本・不明) | 3   |
| 計           | 269 |

## OBOGとは…

オイスカでは、日本での研修や技能実習を終えた研修生・技能実習生をOBOGと呼んでいます。訪日研修には参加していないものの、各国の研修センターを卒業した研修生のことは「ローカルOBOG」と呼び、区別することもあります。

本誌3月号で紹介した通り、オイスカ10カ年計画(2021・2030)達成に向けた第一歩として、昨年12月から今年1月末までの約2カ月間「2021オイスカ冬募金」を実施しました。これまでも災害に対する緊急支援や「子供の森」計画など、事業を限定した寄附の呼びかけは行ってきましたが、活動全般への季節募金の実施は初めてのこと。担当スタッフも不安を感じながらの取り組みとなりましたが、多くの皆さまからご支援をいただくことができました。

そしてもう一つ、この冬募金と並行し、海外に向けて初めての試みが行われていました。それが「OBOG募金」です。これは、国内の4つの研修センター(中部日本、関西、四国、西日本)支援を目的とし、これまで各センターで学んだ訪日研修生、技能実習生を対象として呼びかけを行ったもので、自身もOGである本部啓発普及部のマリア・グラゼン・アセリットの提案で実施が決定。各センタースタッフからのメッセージを添えた募金のお願いを、各国のOBOGに送付。SNSでも発信、拡散し、より多くの訪日研修修了生に届くよう努め、2022年4月1日までに、13カ国269名から176万1452円の寄附が集まりました。これらの寄附は、OBOGの希望を反映しながら4研修センターに配分され、研修に活用する糊摺り機などの農業機材・備品の購入やセンターの環境改善のために活用される予定です。

# お世話になったセンターへ、 そして次の研修生のために

マリア・グラゼン・アセリット (啓発普及部 主任)



私は昨年の夏、中部日本研修センターと四国研修センターに出張し、センターが抱える課題を見てきました。コロナ禍で研修生が来日できない中、スタッフはもちろんボランティアの皆さんも、懸命にセンターを支えてくれている姿に心を動かされた一方、施設が老朽化して雨もりしている様子や、備品や設備が不足しているとスタッフが話していたことが特に印象に残りました。そして、私も一人のOGとしてセンターに恩返しをしたいと思い、ほかのOBやOGも同じ気持ちなのではないかと考えるようになりました。

私が「OBOG募金」の発想を得たのは、出張から帰り、冬募金実施のための話し合いをしていた時です。募金への協力の呼びかけ先について議論していた際、ちょうどその時、OBOGの現在の状況について調査していた私は、彼らの連絡先リストを活用した呼びかけができるのではないかと考えました。昨年は、一昨年から続く新型コロナの影響やミャンマーの政変もあり、各国も難しい状況にあったため、はじめは“ダメもと”という気持ちでした。それでも、昨年はオイスカが60周年を迎えたこともあり、今でもオイスカ活動を精力的に行っている“キーパーソン”のOBOGたちが、お祝いや記念という気持ちで協力してくれるかもしれないという淡い期待で、冬募金と同じ2021年12月1日より呼びかけを始めました。

開始してからの反応は想像以上でした。各国の“キーパーソン”が各自のネットワークを活用して、さらに広く関係者に呼びかけをしてくれ、多くのOBOGから支援と応援のコメントが届きました。やはり、皆が訪日研修生時代にお世話になったセンターやスタッフへの恩を感じており、「もっと早くしても良かったのに」どうして今さら？」という声も聞こえてくるほどでした。

また、特に大変な状況にあるはずのミャンマーからも、多くの支援が集まった（右ページ写真）ことが印象に残り、お世話になったセンターに対する彼らの強い思いを感じました。このほか、ホンジュラスのOBで、現在CFPコーディネーターをしているフェルナンドさんからの「この寄附は、私たち研修生がオイスカからもらった、たくさんの貴重な経験に対してはまだまだ取るに足りないもの。それでも、この寄附で新しい研修生が少しでも良い環境で学ぶことに役立つならうれしい」というメッセージが心に残っています。各国からも、訪日研修での特別な体験に対する思いや、センターへの恩についてのコメントが多く寄せられました。

「OBOG募金」を実施して、私も通常の業務ではやり取りをすることのなかった国のOBOGとも仕事をすることができ、とても良かったです。そして、OBOGをはじめ、オイスカで学んだ仲間たちの存在の心強さにも改めて気づかされました。これからも、私たちが受けた恩を、センターや次の研修生に送っていきけるような機会をつくっていきたいと思います。



OBOGに寄附を呼びかけた際に添付したメッセージ。  
募金期間終了後には、感謝のメッセージも各国に送付した